miyagi prefecture forest instructors association MUFUNS



表紙:17期 千葉 惠右

巻頭言

会長 14期 髙橋 孝紀

新しい年を迎えました。

今年の干支と呼ばれる十干・十二支は「癸(みずのと)・ 卯(う)」の年であります。十干の「癸(みずのと)」は十 干の中で最後の10番目に当り「物事の締めくくりと 新たな幕開け」を表すと云われております。前年の種子 が充実し、更に次の季節を迎える春の蕾が開くことを 意味するようです。又、十二支の「卯(う)」は子(ね)年 から数えて4番目の年で、卯という漢字も扉を表わし、 冬という扉が開いて春になることを意味しているよう です。つまり、「癸(みずのと)・卯(う)」の年は「これま での努力が実り、新しい扉が開く」という大事な年とい うわけです。これ迄コロナウィルスに耐えて閉じ籠っ ていた社会が開け、開放的な賑わいのある年が訪れる ことを願っております。とはいっても、単に有頂天にな

って、兎の様に飛び跳ねる年にならない様に、この一年 が地に足がついた年でありたいと思っております。

ウサギといえば誰もが知っている有名な話がありま す。イソップ童話集の「兎と亀」の話です。兎は何故亀 に負けたのでしょうか?識者の話では、常に競争相手 しか見ていなかった兎と、常にゴールにたどり着くこ とを目指していた亀との違いが、勝敗の大きな分かれ 道になったようであります。私たちも又、私たちがめざ す「県土を保全し、次世代に引き継ぐ」という協会の理 念を忘れず、このゴールを見据え、安全で楽しい森の活 動が出来ますように、一歩一歩前に進んでいかなけれ ばなりません。小を積んで大を成すという言葉もあり ます。私たちは、常にこの言葉を卯年ばかりでなく、卯 年を機にもう一度噛みしめていきたいと思います。



P. 1 巻頭言 P.4-5 活動報告 P.2 きかくがいろん P.6 - 7紙上講座 P.3 P.8 施設だより 環境•森林事業部

P.9 リレー式/安全 P.10 生物多様性を考える8 P.11 コラム/後記 P.12 七ヶ浜活動マップ



Gekiron! きかくがいろん Bouron! 雪かきと減災・昆虫を好きになりましょう。考

~

1期 木村 健太郎

【雪かきと防災・減災】

今年も適度に雪かきができて、嬉しかったです。県 北に住んでいる方々に怒られそうですが・・・。今年 から柄がクネっと曲がって左手の位置が高くなる雪か きショベルを使っているのですが、これがなかなか調 子良くて、今年は腰が軽いです。

でも、年々雪かきする人は減っていますね。積雪の中通学している子どもたちを見ていると、ほとんどの子が普通の運動靴です。歩道が雪かきされていないので、前に歩いた人が踏み固めた跡を歩いていくような感じで不自由そうに歩いています。

日本海側などの雪国は別だと思いますが、雪かきをする理由は、損得勘定や人助け的なものではなく、感覚的なものだと思います。私は、「自分の家の前に雪が積もっているのは恥だ」「隣の人が雪かきをしていたら、出て行かないのは卑怯だ」という感覚を持っています。親や先生に教えられたわけではありませんが、昔は、自然とそういう感性が育つ社会だったのでしょう。

現在は、むしろ「運動不足解消!」や「筋トレ!」になるので、雪が積もったら楽しくて仕方ないです。

大雪!という面から見ても、現代の防災・減災教育はやはり的外れです。大雪が降ったら、「全員必ず防寒長靴を履いて、通学路の雪かきを終えてから通学するように!」というのが本来の防災・減災教育でしょう。「運動靴でも歩けるようになるまで、役場が対応するのを待ちましょう」とか、「雪で濡れた運動靴はちゃんと乾かしましょう」なんて意味が分かりません。

何か困ったことが起きたら即座に「武装」して「協力」できる感性こそが防災の基本なのです。「非常持ち出し袋」なんて、普段から使う癖をつけておかなければ、いざという時に何の役にも立たないのです。

そういえば、森林教室に参加する学校の子どもたちも、長靴を履いてきてくれる子が少ないです。「必ず長靴を持ってこさせるように」と学校には伝えるのですが、「持っている子が少ないので」「強制はできません」で終わりです。野球やサッカーをする時にスパイクシューズを履くように、森づくり活動の装備は「長靴」と決まっているのです。長靴の便利さや、履物の使い分けを教えるのも大切な教育です。

ちなみに、私が大抵「裸足にサンダル」スタイルなのは、手入れが必要な地面にいち早く気づくためです。 強靭な靴を履いていると、地面がトゲトゲでもツルツ ルでも気づきにくいのです。これも"防災"です。

【"好き"と"苦手"考】

さて、いよいよ23期生の方々も晴れて認定式を迎えますが、ここ数年の傾向として、昆虫や両生爬虫類・お魚などに関心を持つインストラクターが減ってきています。学校で子どもたちを相手にする際は、やはり動く生き物たちを捕まえて解説することが大事になるので、何とかがんばって欲しいのですが・・・。

しかし、無理に押し付けてもダメなことは分かっているので、少しずつ、興味を持ってくれる人を増やしていくしかないです。

野球界のレジェンドであるイチローさんの有名な言葉に、「努力を努力だと思っている時点で、好きでやってるヤツには勝てない」というのがあります。森林インストラクターが真っ先に教えるべきことは、努力して覚えたことではなく、「好きなこと」です。「好きなこと」は、ロ下手だろうが何だろうが、相手にもストレートに伝わり、結果的に「良い活動ができた!」ということになります。

巷で行われている「環境教育」の限界がここにあります。「CO2削減」や「再生可能エネルギーの普及」など、それが好きでたまらなくてやっているのなら良いのですが、大抵の場合、損得勘定や、ネガティブでも「長いものに巻かれろ」的な発想で、一夜漬けの知識を使って話をしている方が多いでしょう。「体験」や「趣味」に基づいていないと、「思い」がこもっていないので、伝えたいことが相手に伝わりません。

結局、歳をとってから苦手なことを覚えるのは無理だと思います。そんな時間と労力をかけるより、好きなことをどう活動に生かすか、ということを優先させたほうがいいと思います。

私は、森林や自然に関することはもちろん、"テレビゲーム"と"酒のみ"と"女遊び"以外の遊びは何でも大好きです。新しい遊びを見つけると、ある程度できるようになるまで1人で挑戦してみないと気がすまないので、人知れず練習してよく怪我をしています。「あっ、面白い!」と思ったら、どんなに難しくても必ずマスターできると思っています。ただ、「何が面白いんだろう?」と疑問を持ったらまずダメなので、すぐに諦めて次に移ります。当然のことながら仕事も全て大好きなので、「気づいたら夜中!」ということも多いです。おそらく死ぬまで、ずっと毎日楽しくて仕方ないと思います。貧乏でも常に体が痛くても、ストレスフリーが一番です。

** 今年は七・七と縁起がいいよ! 参加お待ちしてます! ***



🤛 今「七ツ森」が熱い!

環境・森林事業部 3期 原 恒夫

新型コロナウイルスが拡散し始めて4年目に入り、 ワクチンの普及と感染者数減少でウィズコロナにシ フトしつつあります。当協会も昨年秋頃から活動が増 えてきました。

昨年10月末に大和町宮床の七ツ森地区の「東京エ レクトロンの森」東隣に㈱明治様の新しい森2.53 ha が生まれました。これに続き今年は新たにさらに 東隣に設備工事会社のダイダン㈱様の森3.47ha と 手前道路沿い旧駐車スペース奥に鉄道建設に強い鉄 建建設㈱様の森5.06ha の整備に取り掛かる段取り です。

七ツ森県有林138ha は平成9・10年度に県民 が身近に里山とふれあい、多様な生物が生息する里山 環境への理解と関心を深める場を整備するために宮

城県が取得しました。ここは元々溜池を抱えた水田跡 地と広葉樹・針葉樹の混交林の里山でした。当初水田 跡地の一部にそばを植えましたが、収穫間近にほとん どカモシカに食べられ残念な思いをしました。その後 平成26・27年度に「環境税」の使途事業「七ツ森 里山環境学習林整備事業」として整備されました。最 初に東京エレクトロン㈱様の整備に着手して今日に 至っていますが、後が続きませんでした。

ようやく昨年㈱明治様の開所式に続いて、この3月 にはダイダン(株)様・鉄建建設(株)様の森の踏査を行い、 4月から本格的整備に取り掛かります。新しい期の 方々も計画の立案、藪地の切り開き・地拵えから活動 に参加して一緒に汗を流しませんか。



風光明媚な七ヶ浜をフィールドに!

2期 進藤 恵美

当協会では、七ヶ浜町でも海岸防災林関連の活動を積極的に展開しています。震災直後、諏訪神社敷地内での井戸掘 りと周辺整備から始まり、菖蒲田浜海岸防災林の植樹、表浜緑地には複数の企業が企業の森を作り、代ヶ崎地区のおは じきアートがある浜では地元の要望を受けて植樹活動を行ってきました。(裏表紙の地図参照のこと) 今年は更に充実 した活動を広げていく予定です。会員の皆さんに七ヶ浜町を知っていただきたいと、"しちがはまツーリズム"の鈴木 わかこさんにお話を伺いました。彼女自身協会との関わりは深く、とうはつの森の植樹に家族と参加したこともあり、 地元表浜の「ゴルファー桜の森 七ヶ浜」で開所式にも参加しています。町の見所を紹介してもらいました。

七ヶ浜町には震災後、町外から多くの企業や団体が 入ってきて新しい事業や活動を始めています。七ヶ浜 をまるごと案内する"しちがはまツーリズム"という 団体を立ち上げて、新しい人達と地域住民が馴染むよ うに橋渡しをする活動をしています。公園や施設が整 備され、野外活動やスポーツにもってこいの環境を持 つ町です。パラグライダーや気球、サップも盛んです。 町は今、ダーツを普及させようとあちらこちらに無料 の体験コーナーを設けています。

君ヶ岡公園は、お花見の時期に屋台も出て賑やかで、 ウェディングのフォトスポットとしても多くの人に 利用されています。一方では人の手が入らないところ は暗く、寂しい場所です。協会が桜を植樹して昔のよ うな桜の園をよみがえらせてくれたらそれはうれし いことです。

七ヶ浜の観光 PR キャラクターは「ぼっけのボーち ゃん」ですが、タコ、タチウオ、アサリなど海産物も 豊富です。海の幸を活かすグルメ活動も広がっていま す。ボッケだけでなく七ヶ浜ならではの名産を伝えた いとの思いで海苔まつりを開催しています。

表浜緑地の上方に見える高山地区は外国人専用避 暑地*で私有地なので入れません。映画「重力ピエロ」 のロケ地にもなった場所で明治時代から丁寧な暮ら しをしている家が建ち並んでいます。夏になると多く の外国人が避暑を楽しむためにやって来ます。毎週末 のビーチクリーン活動にも参加する環境意識の高い 方々です。

七ヶ浜は名前の通り、7つの浜の地区が合併してで きた町です。風光明媚と言い表されるように、昔から 自然を大事にしてきた人々です。なにか木を植えてい るようだなと地域の人は見ているので、積極的に地域 住民に働きかけ情報提供をしたら地元の方々も参加 するようになるのではないでしょうか、とわかこさん は話してくださいました。

協会は七ヶ浜を舞台に大々的に活動を展開する予定 です。ぜひ、七ヶ浜を訪れて爽快な気分やグルメを体 験してください。次号にも七ヶ浜紹介は続きます。

※七ヶ浜町花渕浜高山外国人避暑地:「山の軽井沢、湖の野尻湖、海の高山」と称され、「日本三大外国人避暑地」の一つ とされた。二高に赴任していた外国人教師が1888年にハンティングに来て気に入ったことから始まり、1907年に 999年間利用する権利が締結された。七ヶ浜国際村のプリマスハウスに歴史資料の展示がある。

山開き式

20期 髙橋 秀

山開きは協会の会員にとって、新たな年の始まりに当たっての神聖な行事で、山の神を迎えこの一年の安全を祈願します。山開き当日の1月21日(土)には、事務局も含め24名が青少年の森の裏山に集まり、けんたろすの司会で厳かに始まりました。

式は修祓(しゅばつ)から始まり、神職に扮した高橋会長が大幣(おおぬさ、榊の枝や白木の棒に紙垂などを付けたもの)で、参加者の穢れを清めた後降神の儀と続き、祭壇の中央に備え祀る依り代(ヨリシロ)に山の神をお招きします。途中オーと声を発しましたがこれは警蹕(けいひつ)と言って、神様が通るので謹んでお迎えするようにという意味だとか? 続いて献饌(けんせん)の儀で、山の神に供物をお供えし、祝詞奏上と続きます。祝詞は髙橋会長が奏上しているのですが、まるで本物の神職が会長に乗り移り山の神に奏上しているかのように、その言葉には霊力が宿り、青少年の森の裏山に響きわたります。

続いて協会活動のフィールドに危険が及ばないように大幣(おおぬさ)で四方を祓い清めます。地鎮の儀では原環境・森林事業部長が金色に塗られた鍬、鋸で土を掘り、木を切る刃入れの儀を行い作業の安全を祈願しました。これで初めて作業道具の使用が可能となります。

式は玉串奉奠と続き、全員でそれぞれ活動の安全を 祈願します。撤饌の儀でお供え物を下げ、続く昇神の儀 でお招きした神にお礼を述べ天上界に帰っていただい た後、全員でお神酒に代わる甘酒とお菓子をいただき 山開き終了です。

北風が吹く寒い中での山開きでしたが、マンサクの 花がほんの少し咲き始めていました。

山開きの1時間後には、ENEOSの森に刈払機とチェーンソーのエンジン音が山一帯に響き渡り、さっそく今年初めての作業開始です。午後は薪割りや枯損木伐採のためのマーキングと作業が続き、新年早々かなりハードでした。今年一年山の神のご加護を頂き安全に作業ができますように!

ところで男性会員の皆さん、今年一年安全に、そして穏やかに協会活動に参加できるよう、それぞれのお宅の「山の神」への献饌(けんせん)の儀、貢ぎ物もお忘れなく!



本職さながら! 祝詞をあげる髙橋会長

七ヶ浜町表浜緑地整備作業に参加して

14期 原田 良一

当会の令和 5 年度の重点整備事業のひとつとなる七ヶ浜町の緑地整備作業に参加しました。

2月9日(木)は、午前は天候にも恵まれたものの、 午後は風が出るとの予報もあり、天候の状況を見て早めに作業を進めることになりました。

渡辺監事の挨拶に続き、作業手順の説明が木村部長からありました。整備場所は、「22 期生の森」の北側およそ5反分、そのエリアを大きく南、北西、北東に3区分し、南:もっくんチーム、北西:かんとくチーム、北東:けんたろすチームに分かれて作業を開始することになりました。作業は、接地刈り払い作業と刈り払った枝葉の集積の2つに分かれました。

私は、長らく整備活動から遠ざかっておりましたの



で、レーキを使った 集積作業の任に当た りました。

当日の参加者は、 24名。私以外の参 加者は作業に精通し ている人たちが多く、 作業は順風満帆。 刈り払い作業は順調に進み、途中、燃料補給も必要となりました。集積作業もそれに呼応して進みはしたものの、作業途中、草むらの陰や地面から、ゴミが少なからず出てきました。レーキで刈り草を引き出すと空き缶とペットボトルなどが入ったビニル袋などが土の上にひょっこり顔を出し、大判小判がザックザクならいいのですが、ペットボトルとコーヒーの空き缶が少なからず出てきました。また以前は住宅地だったようで、ビニル製水道管なども出てきたりしました。

また、刈り払われた枝葉の集積はなかなか寄せが困難でしたが、ある程度かいて寄せた後は、レーキの握り棒の方を刈り払われた枝葉の束の下に突き刺し、巻きずしスタイルで押し進めながら土手の法面にもっていくと効果的との技術を作業仲間から学びました。さらに、ブルーシートがあれば、そこにブロック別に刈り込まれた枝葉を集め、2人がかりで土手の法面に落とす作業は圧巻でした。

整備作業は順調に進み、3月に計画している行事予定に間に合う運びとなったようで、幸先の明るい見通しの中で、作業を終えることができました。

県民の森クリーンアップ

15期 佐々木 健

2022年12月3日(土)は、第16回クリーンアップ活動が行われ、40人以上のスタッフが参加しました。幸い天候に恵まれ午前9時から正午頃にかけて場所ごと4つの回収班に加え、分別班、トラック回収班に分かれて活動しました。

事前に本部・事務局がそれぞれの場所に、番号とゴミ 種類を記した地図を用意していたので、迷うことなく 各場所からごみを集めることができました。

路上から法面下にあるごみを見つけ、各人が勇猛果 敢に回収袋やロープを持って足元の悪い法面の草木か き分け崖を下りて、重い物は路上からロープで引き上 げてもらうなど、協力してごみを回収していきました。

ゴミは、車の部品、タイヤ、テレビ、電子レンジ、便器、マットレス、カラーボックス、空き缶やペットボトル、家庭ごみなどありとあらゆるものがあり、路上から見えないところにも多くのごみが散乱していました。これらのごみを路上に上げた後、トラック回収班と協力してトラックに載せて移動し、中央記念館横の広場で分別すると複数の高いごみの山ができました。

多量のごみとその種類を見たとき、どうしてこれらがここに捨てられているのかという疑問を感じるとともに、改めて人間が生活する中でこれだけの物が必要

で尚且つ、壊れて必要がなくなれば、簡単に自分たちの目に見えないところに捨てて生活しているという自分勝手な心理を見ることができました。

自分の部屋から自宅、隣近所から日々生活している 地域、というように自分が生活しているエリア、つまり は境の環を広げて綺麗にしていこうと考えて生活して いけば、安易に自然に還らないごみを不法に捨てると いうことは減っていくのではないかと感じます。

私の心に留めている言葉に「地球は子孫から借りているもの」があります。改めて子どもや孫、その先の子どもたちに住みよい環境を渡していきたいと、ごみ問題を考える日にもなりました。



散乱する大型ゴミをロープで引き上げる

研修会報告 野鳥・樹木 令和5年1月14日(土)



野鳥観察研修に参加して

22期 阿部 洋一

令和3年度の森林インストラクター養成講座を受講しました。環境保全に関わるボランティア活動をしたいという思いで参加しました。そして、この講座が野鳥観察をするきっかけとなりました。自宅周辺の森林公園が主な散策場所です。林に身を置く心地よさや癒しが気持ち良く、冬場の楽しみとなっています。

今回は令和5年1月14日に開催された会員向け観察会に参加しました。講師、スタッフ、参加者等20名程で、青少年の森~菅野沢溜池~県民の森のコースを2時間で散策。青少年の森では、エサ台にシジュウカラとヤマガラが飛び回り、溜池では、ホシハジロの水中モグリの食餌の様子、県民の森では、カシラダカ、エナガ、コゲラの群れがにぎやかでした。講師からは、今年は冬鳥の飛来が遅く留鳥が主体となった事。越冬地、繁殖地、中継地の環境に異変があると飛来の時期や数にも影響するとの事。野鳥探索のみならず、その動作や生活にも目を向けてほしい等の話がありました。県民の森、海岸防災林等々がより良い越冬地、繁殖地、中継地となるよう、これからも保全活動に参加していきたいと思います。特に海岸防災林はこれからですね。みなさん、がんばっぺ。



植物観察研修に参加して

22 期 芳賀 正孝

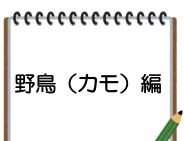
令和5年1月14日(土)13:00より樹木(冬芽) 観察の研修会に参加致しました。

天気は曇りで、冬場の森は落葉樹がすっかり葉を落とし、寒々として、気分的にはあまり乗らない感じでした。もともと樹木の同定は不得意科目で、ひとつ覚えるとふたつ忘れるという悲惨な有様で、ルーペの使い方も覚束ないままの参加です。とりあえず、講師の森山さんは、どういう説明で 2 時間半を乗り切るか?自分が担当するとしたらどうするか?という観点を考慮しました。

結果、当たり前ですが、コース上のどこにどんな樹木があるかしっかり把握しておく、四季それぞれの変化も観察しておくことが必須です。一見、不愛想にみえる冬枯れの森の魅力を伝えるには、単に見分けるだけでなく、語弊はありますが、興味を引くネタの作りこみが重要かと思いました。例えば、定番のクルミの葉痕が人や動物の顔に見える。サルトリイバラは、茎にトゲがあり、小枝がかかりあって猿も思うように動けないため「猿捕り茨」の名がある。ツルウメモドキは、リース・生け花などで人気、等々。後日速攻で、ルーペと冬芽ガイドブックを購入、自主練に励んでおります。

紙上研修

イベントが少ない冬の時期は会員の能力向上をめざして様々な研修が組まれています。 1月14日(土)に青少年の森で野鳥と植物の観察研修会が開かれました。野鳥編の講師を担当した髙橋秀さん(20期)に紙上講座をお願いしました。









植物観察研修会の様子

20期 髙橋 秀

カモは古くから人との関わりの深い身近な水鳥で、青 少年の森近くの水辺でもよく目にします。カモたちがど こからきて、どんな生活をしているのか、そんなカモに ついて紹介します。

日本では約650種の鳥類が記録され、うち55種がカモの仲間、ガンやハクチョウもカモの仲間です。鴨(カモ)は冬の季語にもなっているように、そのほとんどは冬鳥で、主に北極圏で繁殖し越冬のため秋ごろ日本に渡ってきます。そして越冬地の日本でパートナーを見つけ、つがいとなります。冬の間につがいになれば、オスは北極圏への渡りを終えて、フラフラの状態で求愛する必要がなく、メスはすぐに巣作りが出来、時間のロスがありません。またメスは渡りを終えてすぐに巣を構え産卵するので、食べることもままならないため、冬の間オスにガードしてもらい食事に集中できます。そしてつがいとなった殆どのカモは、春になると繁殖地である北極圏に渡り繁殖しますが、マガモ、オシドリ、ヨシガモ、カワアイサは、わずかですが日本でも繁殖が確認されています。





カモには2つの繁殖環境があります。一つは河川や沼近くの湿地に巣を作る地上営巣でマガモやオナガガモ、カルガモがこのタイプです。

もう一つは樹洞営巣、キツツキやクマゲラがあけた穴や木の幹に自然にできた穴をオシドリやカワアイサが巣として利用しますが、その高さは10mになることもあります。繁殖期に入ると、メスはほとんどの時間オスと巣のそばの沼や湿地で過ごし、日に一度だけ素早く巣に戻って卵を一つ産むという行動が10日ほど続きます。その間は巣に居ることも卵を守ることもしません。全ての卵を産み終えて初めて卵を温め始め、約一ヶ月間卵を抱き続けます。抱卵が始まるとオスの役目はすべて終わり、オスは更に数百km離れた食べ物が豊富で安全な湿地に移動します。巣作り、抱卵、子育てと全てメスに任せて、オスだけ食べ物の豊富な安全な場所に移動するなんて、ずるくないですか?と質問が来そうですがこれにはちゃんとした理由があります。どんな鳥でもメンテナンスのため羽根は絶えず生え換わりますが、全部の羽根

が一斉に生え換わり飛べなくなることはありません。しかしカモのオスは、繁殖期が終わると、翼や尾羽のすべてが約3日で抜けてしまい、それから新しい羽根が生えてくるまで、約1ヶ月全く飛べなくなるので、安全な場所に移動する必要があるのです。



毛が全部抜けてしまって、もし生えてこなかったら?と 近頃頭のてっぺんがめっきり薄くなってきた私からする と気になるところですが、カモのオスはちゃんと生えて きます。この時に生えてくる羽根は、メスと同じように 目ただない茶色で、この頃の地味なオスの姿をエクリプ スと言います。エクリプスとは「光を失う」という意味 で、短い期間でも目ただなくして捕食されるリスクを少 なくするためと言われています。この姿で日本に渡って くるので、秋から初冬にかけてのオスは、メスとの見分 けが難しく見つけるのに苦労します。

でも、ここからオスはメスにアピールするためにスーパーモードの派手な姿にどんどん変わっていきます。エクリプスから派手なオスに変わっていく姿を見られるのも越冬地日本でのカモの魅力です。

カモの平均寿命は4年から10年と言われ、毎年このような繁殖行動が繰り返されます。カモはオシドリに代表されるように仲むつまじい鳥と思われていますがパートナーは毎年変わっているのです。

一方で同じカモの仲間でもガンやハクチョウは、どちらか一方が死ぬまでパートナーは替えません。メスにアピールする繁殖羽に生え換わる必要がないため、オスメス同色で外見だけでは見分けがつきません。

また、親ガモの後を必死で追いかけるヒナの愛くるしい姿も魅力の一つですが、留鳥のカルガモ以外日本では その姿をほとんど見ることはできません。

普通、野鳥のヒナは未成熟で羽毛も生えず目も開いていない状態で生まれてくるため、親鳥は長期間餌を運んで育雛します。しかしカモは他の野鳥と異なり脳が発達した状態で孵化するので、羽毛も生え目も見え、すぐに自分で食べ物を食べることもできます。

ー日ごとに産み落とされた卵ですが、孵化の1日前から、卵の中のヒナは鳴き声を上げたり、殻を内側からつ



ついたりしてほかの卵と連絡を取り合い孵化のタイミングをそろえているといわれていて、2~3時間のうちに全ての卵が孵化します。しかし、この時期のヒナは自力で体温を保つことが難しく、暖めてもらうのと、餌場に案内してもらうため、生まれてすぐに身の回りで動くものを親と認識し後をついて回ります。これを「刷り込み」と言って、必死に親について回り、餌場や危険から身を守る方法を約1ヶ月学んで一人前になりますが、オシドリも例外ではありません。オシドリのヒナは生まれた次の日には親について10mもの高さの巣から決死のダイビングをして、食べ物のある安全な水辺へと移動します。カップルで優雅に泳いでいるオシドリですが、そんな試練を乗り越えてここにいるのかと思うと愛おしく思えてきます。

カモはオスの派手な姿も魅力ですが、その生態も魅力 の一つなのです。

私たちの故郷宮城県はラムサール条約に登録され、伊豆沼、内沼、蕪栗沼のある宮城県北部には、毎年冬になると多くのカモやマガンなど数万羽の水鳥が渡って来ます。とくにマガンは主に沼をねぐらにして、日中は田んぼで落穂や雑草を食べて過ごします。警戒心が強く、安全なねぐらと餌場となる水田が不可欠と言われていますが、このあたりの農家は、稲刈り後田んぼを耕さず、春まで水をためる「ふゆみずたんぼ」と呼ばれる方法で、沼に集中するマガンのねぐらを分散させる取り組みを行っています。このねぐらの分散は、鳥インフルエンザが猛威を振るう中にあって、密を防ぐ、とても大切な取り組みで、そのおかげで毎年冬の朝、数万と言われるマガンが一斉に飛び立つ「ねぐら立ち」を私たちは目にすることができます。

折角宮城県に住んでいるのですから、バードウォッチャー憧れの伊豆沼、内沼、蕪栗沼でのバードウォッチングを楽しまれては如何ですか?



県民の森の春夏秋冬

県民の森所長 12期 蜂谷 仁

宮城県 県民の森は、明治100年記念事業として計画され、昭和44年10月に誕生しました。 開園当初の面積(278ha)は現在の約6割強の広さで、その後、四季の森方面が追加され現在の面積(443ha)となり、年間25万人の利用者で賑わっています。

遊歩道・管理道路の総延長は、30km強あり 1 日で 廻ることの出来ない程の長さです。県民の森の目玉で あるフィールドアスレチックは、コースを一周すると 2 kmあり、又、高低差累計で約 200m強とかなりハードな遊具です。近年、めいっぱい汗を流して遊びかねて いる利用者(子どもたち) に大人気です。

園内の四季は、まず、マンサクが黄色い花を咲かせ春の到来を知らせてくれます。これに続き隣接する「ミサワオーナーの森」のカタクリの開花が始まると、園内各所でカタクリを始め、「春の妖精たち」が我先に咲き誇り、遊歩道のいたるところで足止めを余儀なくされます。更にサクラやコブシが咲き始め一気に木々の開花と芽吹きが加速し、萌黄色から深緑の森へ進みます。

深緑の中の散策を楽しんでいると、山吹色のニッコウキスゲがあちこちで待ち構え、心を和ませてくれるようになります。又、近年イノシシ被害で激減したヤマユリも、所々で歓迎してくれます。カブトムシやクワガタムシの元気な姿を見かけるようになると、頭上では、サンコウチョウやオオルリの囀りを耳にするようにな

り、いよいよ夏本番です。

夏鳥の囀りをあまり耳にしなくなる頃になると、虫の音が心地よくなり、やがて記念館周囲のケヤキが色づき始めます。更に進み紅葉の最盛期を迎え、待ちかねていた方々で園内は連日賑わいます。この賑わいは、中央記念館東側のモミジのトンネルから始まり、四季の森のモミジの道や水辺の道周囲へ進み県民の森のハイライトです。広葉樹の落葉が進み、園内は明るく静観になり深い眠りに入ります。これを待ちかねていたように冬鳥が訪れ、バードウォッチャーには待望の冬鳥探鳥の機会となります。更に大寒を過ぎると寒さも緩み、900種強の動植物が目覚め始めます。





ゴールデンウイークの頃最後に咲くアカツキザクラ



春の期待

ことりはうす 22期 吉野 正則

昨年の春から「ことりはうす」に勤務して 1 年になります。今回は太白区の自宅から蔵王町の「ことりはうす」までの四季豊かな通勤コースと野鳥の森での楽しみを紹介します。

仙台市方面から国道 286 号線経由で釜房ダムを通って行きますと、ダムの橋を渡ったところの電信柱の上に約 1.5m 四方もある大きな巣がありました。昨年コウノトリのキズナ君(オス)が作ったものですが、年が明けて気が付くと巣が無くなっていました。強風で吹き飛ばされたのかもしれません。でも春になり繁殖の季節になったら、またキズナ君が巣を作ってくれるのではないかと期待してます。立派な巣を作ってもお嫁さんに出会うことは非常に難しいでしょうが、きっといつかは報われるよと応援したいです。

釜房ダムを過ぎてみちのく公園で左に曲がってしばらく進み「すずらん峠」を越えなければなりません。ここは道幅が狭い所や急でくねくねとカーブの多い峠道です。なぜか心霊スポットとしても知られているようで、そちらに関心のある方は期待して通ってみてください。夜一人で運転しているときなどはちょっと怖い感じがします。でもお天気のいい日にニホンザルやリ

スに出会ったときは和みます。

いよいよ「ことりはうす」が近くなり、別荘地に入る と道路の右側に水色の©印が付いたポールが立ってい ます。湧き水がある目印です。我が家の植物たち(苔、 パイナップルのヘタ、観葉植物)にあげると喜びます。 これで淹れたコーヒーは美味しいと家内が言ってます。

そして春の蔵王野鳥の森で楽しみにしていることの ひとつに鳥の巣箱があります。今年は巣箱で子育てし てくれるでしょうか。特に期待が大きいのがフクロウ です。フクロウのヒナが巣箱から顔を出してくれるで しょうか。静かに見守っていきましょう(フクロウに はナイショです)。





安全のページ

安全で楽しい活動



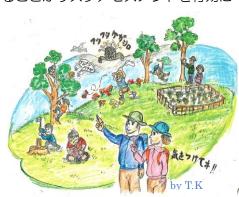
22期 菊地 剛

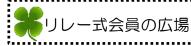
今年も東日本大震災の発生日が近づいてきます。あの 未曾有の大地震そして大津波はいまだに忘れることは できません。私は、自身の家や親族が大きな被災にあっ たわけではありませんが、その後の停電、水道、ガスの 出ない生活は経験したことがありませんでした。最初は 戸惑いもありましたが、キャンプ道具や古い石油ストー ブなどを持ち出し毎日の煮炊きをし、冷蔵庫という文明 の利器は役に立たず、食料は少ない品数しかないものを 分け合って食べ、営業している店やコンビニを見つけて は買い出しに行き、家族が協力し過ごしたことが思い出 されます。

そのような経験は、おそらく今後の災害時に役立つでしょう。この災害の時は、「想定外の」という形容詞が多く使われました。しかし、我々としては今や「想定外」ではなく想定される災害となり、被災した皆さまには大変申し訳ありませんが、「生きていく」減災技術に役立つものとなりました。

私は新米インストラクターとして、森の植物や生物の 観察、ジャガイモやサツマイモの植付、海岸のマツ林の 整備、森の中での材料で子ども達とともに作り遊ぶなど いずれも小学生を主体にした活動に参加してきました が、子どもたちの笑顔や興味を持つ真剣な眼差しが印象的でした。主催者の皆様は万全な計画で活動をすすめています。一度、安全委員として(たった 1 度で申し訳ありません)安全パトロールを行いましたが、どこに危険があるかわかりません。活動も楽しく事故もなく終了しました。

最初に記述した大震災の折、身をもって体験したことから減災の重要さを学び、参加した活動から主催側の安全活動をすすめる方法を学びました。「想定外」ではなく活動の種類に応じ、起こりうる危険を想定し安全対策を講じ、実行することがリスクアセスメントを有効に





身近な生物多様性、生態系の保全について

21期 平野 あかね

昨年11月、日本ジオパークネットワーク (JGN) による「保全」について栗駒での全国研修会、12月には生物多様性フォーラムにスタッフとして参加する機会をいただきました。二つのイベントで共通していたのは「一度失われた自然を戻すのは簡単ではない」というお話で、種や細胞レベルで保存されている絶滅種の復活や、失われそうな種の個体数を復活させるために活動される方々のお話を伺えるのは大変貴重なものでした。

生態系はその環境に合った多様な生物が集結し、棲み分け、支えあい、一つのパズルを作り、そのピースとして、「はまる場所」を求めて生息場所を変えていきます。 目の前に見える範囲の小さな生態系が短い年月の間にも植物の成長や環境の変化に合わせて移り変わっていく様子には驚かされます。

JGN の研修会では地滑りを地質遺産として守る取り組みも紹介されましたが、あれから 14 年の月日がたった今日、そこは木々が生い茂り、地滑りでできた崖には猛禽類の姿も見られ、一度失われた場所に新たな生態系ができているのを見て、緊張した研修会の中で思わず顔がほころんだ瞬間でした。

そして今、ここ蔵王ではオオシラビソが枯れ、麓のナラ枯れと、木々が無残な姿をさらし、外来生物が勢力を増してこれまでの生態系を脅かしています。先日テレビ

で知ったのですが、植物には「毒」を作り出して菌や虫から自分自身を守る力だけでなく、他の植物や虫や鳥に、「今虫に食べられている!」と伝える能力が備わっていて、その「声」を聞いた周りの植物は自ら毒を作り出して身を守ったり、鳥はその声を聞きその虫を食べに来たりするという、自然界のネットワークに驚きました。枯れる原因は温暖化の影響がかなり大きいと思いますが、ナラ枯れなどは多くの木が老木となり、その力が失われつつあることも原因ではないかと感じています。本来人の手で生態系が守られていた森です。失われそうな種を守る、失われた種を復活するのも保全ですが、自然の力を信じ、今、目の前にあるその場所で若き次の世代が成長できるように、この森や大地のサイクルを守っていく

のが今の「全」からる「はきない」と考らない。またいしい。ます。





伊豆沼の保全について学ぶ

シリーズ<生物多様性を考える>8最終回

~原点回帰 これからの生物多様性~

2年間にわたって、生物多様性についてさまざまな 切り口から考えてきましたが、自分なりの概念は固ま

「生物多様性を守るとはどういうことですか?」と 聞かれたら何て答えますか。

ったでしょうか。皆さまにひとつ質問です。

ズバッと答えられる方がいたら尊敬します。私には 無理です。相手にもよりますが、自分でも納得のいく 説明ができたことはありません。

「生物多様性」という言葉は、1986年にアメリカで開催されたフォーラムで提唱されました。これに世界の著名な生物学者が賛同し一気に広まっていくことになりますが、当初は提唱者も著名な生物学者達も、定義することは考えておらず、「大衆の胸に響くことを第一に考えたプロパガンダのためのキャッチコピー」になればいい程度に考えていたようです。

その「単なるキャッチコピー」が、生物多様性条約 や、誰もが知っているラムサール条約の締結につなが りました。日本でも「生物多様性国家戦略2012~2020」で基本戦略やたくさんの数値目標を定めた ほか、都道府県・市町村にも独自の「生物多様性地域 戦略」を定める努力義務を課したことから、「みんなで 考えよう」となったわけです。森林環境贈与税でも行われた地方への丸投げです。地方は何をやったら良いか分からず、「楽にできるアリバイづくり」に走ったため、成果と呼べるものは乏しい結果となりました。

確かに、生物多様性の諸問題を調査し解明していくのは科学の仕事で、生物学者からはさまざまな問題が指摘されましたが、それを「解決」するのは政治の仕事です。政治の仕事には優先順位があり、国民の生命や財産が脅かされる事態が最優先されるので、特定の生き物が減った・増えたといったことが国会で議論されたり、選挙の争点になったりすることはほとんどありません。もちろん、大した予算もつきません。

また、生物学者それぞれの専門的な意見を、一般人が理解して実践できるわけもなく、環境省も各都道府県も、「生物多様性とは何かということを分かりやすくまとめる」⇒「やはり理解できない」⇒「みんなの自主的な取り組みに期待」で終わってしまった感じです。

さて、これまでのことはともかく、これからどうするのかが大切です。「生物多様性の意味」などもう「ただのキャッチコピー」に戻していいので、自然環境に与えるダメージが少ない生き方をしていきましょう。

もはや、外来種を敵視し、池の水を全部抜いて駆除 し、ヒアリやセアカゴケグモの恐怖を煽ったところで、 人間の力ではどうにもならないことが多すぎます。



クピアカツヤカミキリ 首のあたりが赤い

1期 木村 健太郎

ツヤハダゴマダラカミキリ

しかし、諸外国はともかく、日本に関してはそれほど心配なさそうです。自然の生態系を破壊してきたのは、太平洋戦争から戦後の高度経済成長、それに伴う大規模開発と一気の人口増加です。そして、世界的なグローバル化の流れとペットブームにトドメを刺されました。ちょうど、贅沢な暮らしを夢見て国土を破壊しまくった団塊の世代の歴史と重なります。

逆に、若い人たちを見ていると、戦争や争いは嫌い、 金持ちにならなくて良い、子どもは育てられない、で きるだけ地元を出たくない、自然のことはよくわから ないけれど自然の大切さは知っている、海外旅行より バーチャル旅行!といった、団塊の世代とは正反対の 感性や考えを持っています。若い人たちは、図らずも 生物多様性に優しいかもしれません。

さて、これからどうすれば良いのでしょうか。 まず、個人レベルでは、「さまざまな生き物への関心 を持ち続け、人にも自然にも優しく」でしょう。

これから最も問題になりそうなのは、街路樹を食い 荒らすカミキリムシでしょうから、サビイロクワ・ク ビアカツヤ・ツヤハダゴマダラの3種だけは「見つけ て踏み潰せ!」と子どもたちに教えるべきでしょうか。

宮城県としては、COP10でクローズアップされた「里山環境」を失うわけにはいかないでしょう。江戸時代くらいから、農耕と山林の上手な利用によって結果的に保全されてきた「世界的にも貴重と言われる生物多様な環境」を、中間温帯特有の美しい雑木林とともに後世に引き継ぐことは、ある程度おカネをかける価値のある重要なことです。「ムダな土地はメガソーラー」ではなく、一見ムダに見える空間も、少し手入れをするだけで貴重な生態系が戻ってくるということに気づかなければなりません。

そして当協会は、これまでどおり企業や学校などと連携し、美しい里山や生物多様な海岸防災林を保全するとともに、できるだけ多くの子どもたちが自然の生き物たちを大切にする感性を育めるように活動することでしょう。植物や整備作業だけでなく、動物や昆虫好きの会員も増えないかなぁというのは私の個人的な願いですが、毎年、認定試験の「鳥獣・昆虫」だけグタグタな現実を見ては、人知れず肩を落としています。

結論的に、日本は若い人の感性に希望あり。宮城県は当協会がいるので大丈夫。世界は、軍備増強やら軍事演習とやらでドンパチやっているヒマとカネがあったら、もう少し動植物を愛する気持ちを持とうよ、と言い出す宇宙人みたいなリーダーが地球上に出現することを待つしかないのが現状です。

ちょっとひと息エッセー



森林浴 "Shinrin-yoku"

22期 及川 結

春が近づき、徐々に花の咲く季節となってきました。カタクリやショウジョウバカマといったスプリングエフェメラル達が一面に咲くのも楽しみですが、日本の春の花といえば、やはりサクラが代表的でしょうか。県民の森やことりはうすでお花見をされる方もいらっしゃるかと思います。森林浴に関するとある研究では、大画面で「森林」の画像を見た時には脳と自律神経の活動が鎮静するのに対し、「桜」の画像を見た時には覚醒するという結果が出たそうです。日本では、そうした室内や森林内での実験による森林浴の健康への効果の研究が 2000 年代から実施され、森林セラピーといったプログラムが開発されてきました。

「森林浴」という言葉は、今では広く一般的に使われていますが、実は40年ほど前に日本で生まれた言葉だそうです。1982年に当時の林野庁長官秋山智英さんが朝日新聞で使ったのが初めとされています。宮城県森林インストラクターの先輩方にはその当時の記事を読んだ方もおいでかもしれませんが、昭和の終

わりに生まれた私には意外なことで、一般の方に3択でクイズを出しても北欧フィンランド発祥に多く手が上がったりします。

そんな森林浴、最近では海外でも日本発祥の健康法 "Shinrin-yoku" あるいは "Forest Bathing" として親しまれるようになってきました。Instagram で #Shinrinyoku などと検索すると、海外の方の投稿が多く出てきます。コロナ禍以降さらに注目が高まっており、国内外でさらなる研究や、健康・観光・教育などさまざまな分野での本格的な応用が試みられています。忙しくストレスの多い日常生活を送っている方には、森林浴がリラックス、免疫力改善、気分改善などにとても効果的です。最後に実施する際のポイントをご紹介すると、「五感を使い、深呼吸をしながらゆったりと森で過ごす」という非常にシンプルでありながら、とても奥深いです。私の下手な言葉で説明するより、効果のほどはぜひみなさんに森へ足を運んで確かめていただきたいものです。







2022年10月 宮城県蔵王野鳥の森自然観察センターことりはうすでの「森林セラピー体験イベント」の様子

令和5年度通常総会のお知らせ

◎ 令和5年6月3日(土)
仙台市市民サポートセンターセミナーホール

記念講演:13:00~ 総会:14:00~

☆会報紙の表紙

表紙を飾る写真・イラスト・絵を募集します。活動中に目にする風景や自然をテーマにお寄せください。

☆紙上講座原稿

皆さんが密かに隠し持っている技術・得意技・情報を紙上で披露してみませんか。

連絡先:事務局まで

編集後記▶雀の水浴びを見たいと水盤を据えたところ、鵯が水飲みに来るようになりました。試しに林檎片を枝木に挿してみると鵯が器用についばみます。その様子が愛らしく、毎日の楽しみとなりました。しかし、雀に撒いたパン切れまで鵯が横取りします。鵯はパンも好物だと知り、雀には米だけを撒くようにしました。これで雀と鵯の諍いは解消しましたが、雀が水浴びすることはまだありません。(9期篠澤知子)▶大部分の人は奈良の大仏を拝観していると思います。大仏の前の一対の大きな花瓶に足が8本の蝶が止まっているのをご存じの方はほとんどいないと思います。この8本足の蝶の作者は自分の目で8本足の蝶を見てこの蝶は極楽浄土から飛んできた蝶に間違いないと思い8本足の蝶を作成して花瓶に止まらせたと私は思っています。今度奈良に行くチャンスがあったら是非この蝶に目を向けて下さい。(11 期鈴木武)

七ヶ浜活動マップ





ぼっけのボーちゃん



七ケ浜町で取れる 秋冬の代表的な食材 の一つが「ボッケ(ケ ムシカジカ)」。味は 絶品ですが近年漁獲 量が減っています。



2君才聞公園

保養地として、軽井沢か野尻湖か、七ヶ浜かと言われてきました。君ヶ岡の地名は伊達政宗離宮を建設しようとして名付けた地名。また大正天皇の行幸を記念して君ヶ岡公園を御用邸敷地として献納する話もあったようです。御成婚祝賀会がこの地で開かれ、それを記念しての桜の植樹が行われ、町の桜の名所となりました。しかし今多くの桜が寿命を迎えています。桜の名所を復活する為大規模植樹を計画中です。













①大木囲具塚遺跡公園

縄文時代の集落跡で、国指定史跡。東北地方には約400箇所の縄文時代の貝塚がありますが松島湾は有数の貝塚密集地域。東北地方中・南部の土器形式「大木式土器」の標識遺跡となっています。広大な史跡公園内にはエドヒガンやヤマザクラなど野生種の桜が植えられており4月には圧巻の見頃を迎えます。



発行 特定非営利活動法人 宮城県森林インストラクター協会 〒981-0121 宮城県宮城郡利府町神谷沢字菅野沢41 青少年の森 TEL&FAX: 022-255-8223

メール: mifi@bz04.plala.or.jp HP: http://mifi.main.jp

